1P117

福祉型児童発達支援センターにおける痙攣時対応の体制づくり―けいれん時チェックシートを活用して―

深水 沙穂里[1]、井上 真理子[1]、田中 理恵[1]、戸川 みゆき[2]、上島 望美[2]、梶浦 愛子[2]

[1]総合大雄会病院
[2]一宮市立いずみ学園

【目的】
福祉型児童発達支援センターで痙攣発生時に使用する痙攣時対応表兼記録用紙を作成する機会を得た。また、その用紙を活用し、福祉型児童発達支援センターの施設職員が痙攣時の対応に困らないような体制の構築を目的とする。

【方法】
本研究は当病院の倫理審査委員会の承認を受け実施した。痙攣発生時に 使用する痙攣時対応表兼記録用紙をフローチャート形式とチェックシート形式の２種類を作成。２種類の用紙を使用し、シミュレーション講習を実施した。講習実施後にアンケートを実施し、講習や用紙の評価を行った。共同研究者と用紙に関するディスカッション後逐語録を作成、内容的分析を行った。

【結果】
保育士27名、看護師1名、その他職員4名、計32名にアンケートを実施し、78％はチェックシートが使いやすいと感じていた。研修後施設内で用紙を使用し対応に至ったケースは39件だった。ディスカッションでは、チェックシートは「一目瞭然」で「ぱっとみて」緊急時の項目が明瞭であり、緊急度に基づく色分けは緊急度の高い症状を視覚的に強調し、より有用であると感じていた。施設では保育士・看護師共に用紙を使用しており、使用および記録しにくさはなく、「過去の状況を把握」し「問い合わせへの返答も可能にした」と記録物としての有用性もあげられた。「シミュレーション講習による施設職員の意識・行動・学習意欲に対する変化」もみられ、用紙がない状況下での判断も可能にし、体制はできつつあると認識していた。

【考察】
医療者と施設職員が共に用紙の作成・検討することが、一次救命の判断と医療者（医師含む）の必要な情報も確認でき、より施設に適した用紙作成に繋がったと考える。また、施設職員が繰り返しシミュレーション講習の受講をしてチェックシートを実際に使用することで、状況、病状、緊急性、救急搬送の必要性の判断を可能にした。さらに、今回の研究の取り組みにおいて、医療施設と地域間の連携強化という効果もあった。子ども達が、地域や施設の生活の中で安全に過ごしていくために急変時の体制を整えていくことは医療者としての重要な役割の１つと考える。

1P118

医療的ケア児を含む重症児者と家族を支援するためのスーパーバイズ事業

岩本 彰太郎、平山 雅浩

三重大学医学部附属病院

【はじめに】
医療的ケアを必要とする重症児者が増える中、国あるいは自治体レベルで様々な施策が打ち出され、多様な取り組みが実施されるようになってきている。しかし、依然として重症児者と家族のための地域支援体制は十分とはいえず、相談支援専門員をはじめとする支援者が抱える課題は大きい。今回、重症児者と家族を支援する県内地域ネット内において、支援者支援（アドバイス機能）および地域社会資源の診断と受け皿の拡充に向けた地域づくり（コンサルテーション機能）を合わせ持つスーパーバイズ（SV）チームを設置したので報告する。

【県内重症児者地域ネットワーク】
三重県には、重症児者と家族を支援するための地域連携体制として4つのネットが運営されており、県内全ての自治体も同ネットに所属して、研修会等に参加している。各ネットの運営や研修会開催頻度は様々であるが、医療度の高い医療的ケア児と家族を支援する支援者の孤立や地域で利用できる社会資源の不足が課題となっている。

【SVチームの設置】
2020年、県障がい福祉課と協働し、各ネット内に支援者支援（アドバイス機能）と地域づくり（コンサルテーション機能）の役割を担うSVチームを設置した。SVチームメンバーは、各4ネット事務局を中心に選出され、メンバー平均人数は30名（19 ～ 44名）、職種も医療職から行政職まで様々な専門家で構成された。

【SVチームメンバー向け研修会】
SVチームメンバー向けに、期待される役割とその共通認識を図るために、厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「医療的ケア児等相談支援スーパーバイザー育成プログラム」に取組まれた方を外部講師としてお招きし、2日間にわたる研修会を開催した。コロナ禍でWeb形式での講義および模擬相談事例をもとにグループワークを実施し、各ネット内でのSVチームメンバーの顔の見える関係や専門家による多職種によるSVの意義を共有できた。

【SV事業の今後】
2021年度から各ネット内でSV事業が実施運営される。各ネット内SVメンバーから選出された構成員によるSVワーキンググループを設置し、実際の相談内容の進捗状況や運営課題を整理する。本事業が、ネット内での相談に完結せず、ネット間での共有や、ネットの垣根を超えたSVチーム間での相談・連携に繋がることで、重症児者と家族の地域支援体制の更なる充実が期待される。

Presented by Medical*Online